

辰七月二日阿蘭陀國使節兵船一艘來入
前鍋嶋侯筑前黒田侯陣營圖

蘭船長三十間半餘幅七間半餘船
號フレゴトフランシスコ大火丸三十八挺
船西側ニ段攝之小舟八艘イナ
皮舟大小六艘平常墨田使節人
名ハ一ハアツクナト一ハ高官人
乗船人總三百二十人

南島原市 × 西南学院大学博物館 連携特別展

東西交流の軌跡

Tracks of Exchange between East and West Encounter with Arima and Europe

有馬とヨーロッパの出会い

蘭船初來止於此四日後
入港内止於西泊陣前

三冊余是淡口
七星至南仁
未依止



ごあいさつ

南島原市はキリシタン文化にゆかりのある史跡をはじめ様々な文化財・歴史を有し、これまでこれらを活かしたまちづくりを進めて参りました。平成19年度からは南島原市に所在する国指定史跡である日野江城跡・原城跡を構成資産に含む「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録を目指し、史跡の整備や推進活動にも取り組んでおります。

キリスト教史に関する豊富な資料と知識を有する西南学院博物館とは、かねてより資料貸借等で交流をさせていただいておりましたが、平成27年3月に、更なる連携の深化のため、研究・教育に関する協定を締結いたしました。当市の原城図書館における企画展の開催や、市内での西南学院大学博物館ワークショップの開催など、すでに様々な企画にご協力いただいておりますが、この度、連携での特別展を開催する運びとなりました。

日野江城跡・原城跡は、日本における16世紀の西欧との交流やキリスト教宣教・普及、そして禁教時代初期における信仰継承や国家的な弾圧を示す遺跡であり、日本だけでなく世界の歴史や宗教を考える上で様々なことを我々に伝えています。今回の展示では、この二つの史跡に関する資料に加え、キリスト教や長崎での海外との交流等に関する西南学院大学博物館の豊富な資料を展示し、日野江城・原城とその周辺の時における歴史や文化を紹介します。日本と西欧世界の出会いや交流の歴史を感じ、また世界遺産登録を目指す二つの史跡のこともより深く知っていただければ幸いです。

南島原市では今後も、西南学院大学博物館にもご協力をいただきながら、市の歴史に関する調査研究や教育普及、それらを活かしたまちづくりにますます活発に取り組んで参ります。

結びに、西南学院大学博物館の皆様及び特別展開催にご協力いただきました関係者の皆様に心よりお礼申し上げ、ご挨拶といたします。

2015年8月28日

南島原市

市長 松本 政博

ごあいさつ

この度は、「東西交流の軌跡－有馬とヨーロッパの出会い－」展にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。西南学院大学博物館は、これまで地域や他大学の博物館と連携し、本学学生や地域の方々に向けて大学博物館の「知」を様々なかたちで発信してきました。本展覧会もこのような地域連携のひとつの結実といえます。

これまで西南学院大学博物館は、日本キリスト教史において重要な地である南島原市からキリスト教関係の資料をお借りしてきました。2015年3月に南島原市と協定を結び、当館の資料を南島原市原城図書館で展示をするなどの共同事業を行っております。そして今回はじめて、南島原市との連携特別展を開催するに至りました。

本展覧会では、日本と西欧との出会いがキリスト教の受容とともに始まり、その後、禁教という幕府の政策の転換を経ながらも続けられた東西交流の歴史をご紹介します。特に、その重要な舞台である南島原市から、日野江城跡・原城跡より出土したものなど、当時の状況を知ることができる貴重な資料を展示していただきます。現在、日野江城跡・原城跡の世界遺産登録に向けて、南島原市は精力的に活動を展開しており、登録が達成されることは当館としても大変喜ばしいこととございます。本展覧会が、これらの史跡の重要性をご来館者の皆さまに感じていただける機会となれば幸いです。

最後となりましたが、南島原市にご担当者の皆様、また、特別展開催にあたりご協力賜りました関係者各位に心より感謝申し上げます。

2015年8月28日

西南学院大学博物館

館長 宮崎 克則

開催概要

島国である日本は古くから海を通じて周辺諸国と交流してきました。大航海時代にともなう西洋との出会いは、日本に大きな衝撃を与えることになったと同時に世界史の足跡に刻まれることになりました。海を越えてもたらされた新しい知識や文化は、人々の知的好奇心を刺激し広く受け入れられていきましたが、その一方で常に国内の文化との対立もありました。東西交流とは、まさにこのような対立と受容の中で展開されてきました。

南島原市では、有馬氏時代に海外交流が盛んに行なわれました。他方、江戸時代には島原・天草一揆の舞台となった地であり、まさに、新旧対立の摩擦による影響を大きく受けたところ です。世界遺産登録を目指す構成資産の日野江城跡・原城跡の二つの史跡は、その歴史を現代に伝えていきます。

本展覧会は、南島原市所蔵の日野江城跡・原城跡関係資料とともに、西南学院大学博物館の所蔵する中世から近代にかけてのキリスト教関係資料、アジア・西欧と日本との交流を示す資料で構成されています。日本と西欧世界との出会い・受容と対立・交流などの視点から南島原の歴史を眺め、日野江城・原城とその周辺の時代を浮かび上がらせていく内容となっています。本展覧会を通じて南島原市民への世界遺産登録への気運を高めるとともに、地域文化の再発見の一助になれば幸甚です。

[監修：安高 啓明(熊本大学文学部歴史学科 准教授)]

[会 期] 2015年8月28日(金)→10月7日(水)

| メイン会場 | 有馬キリシタン遺産記念館 「東西交流の軌跡—有馬とヨーロッパの出会い—」

| 関連展示会場 | 原城図書館 「東西交流の軌跡—禁教・海禁政策と長崎—」

イベント情報

せいなんおでかけワークショップ 2015

日時／2015年9月26日(土) 10:00～11:30 場所／原城図書館

～世界にひとつだけ！オリジナル缶バッジをつくろう in 原城図書館～

■参加無料・事前申し込み要 ■定員 30名

■申し込み・問い合わせ 原城図書館 (tel.050-3381-5078)

特別展関連公開講演会

日時／2015年9月26日(土) 14:00～15:30 場所／原城オアシスセンター

(〒859-2412 南島原市南有馬町乙 936 番地)

講 師／安高 啓明 氏(熊本大学文学部歴史学科准教授)

題 目／海外交流史のなかの南島原—日本キリスト教史に刻まれる世界遺産登録

■入場無料・事前申し込み要(当日参加も可能)

■申し込み・問い合わせ 南島原市教育委員会生涯学習課 (tel.050-3381-5082)

目次

ごあいさつ

南島原市 市長	松本 政博	2
西南学院大学博物館 館長	宮崎 克則	3

開催概要

熊本大学文学部歴史学科 准教授	安高 啓明	4
-----------------	-------	---

目次・凡例

本編

I. 有馬と世界	6
----------	---

II. 西欧との出会い	9
-------------	---

II-1. キリシタン文化の受容と排斥

コラム 日野江城跡階段にみる仏教とキリスト教の対立

南島原市教育委員会 世界遺産登録推進室 文化財調査員 稲益 あゆみ

II-2. 島原・天草一揆

III. 日欧交流の果てに	16
---------------	----

関連展示 禁教・海禁政策と長崎 [原城図書館企画展示]	22
-----------------------------	----

出品目録	27
------	----

論考 海外交流史のなかの南島原 - 日本キリスト教史に刻まれる世界遺産登録

熊本大学文学部歴史学科 准教授	安高 啓明	28
-----------------	-------	----

文字史料に残された島原・天草一揆時の原城

南島原市教育委員会 世界遺産登録推進室 文化財調査員	稲益 あゆみ	31
----------------------------	--------	----

アジアにおけるキリスト教の布教と受容 - 西南学院大学博物館所蔵資料から -

西南学院大学博物館 学芸研究員	内島 美奈子	33
-----------------	--------	----

凡例

◎本図録は南島原市・西南学院大学博物館連携特別展示「東西交流の軌跡-有馬とヨーロッパの出会い-」(会期2015年8月28日(金)～10月7日(水))開催にあたり作成したものである。関連展示として、原城図書館で「東西交流の軌跡-禁教・海禁政策と長崎-」を同時開催している。

◎図録番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。

◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することは認めない。

◎本図録の資料解説は内島美奈子(西南学院大学博物館学芸研究員)、稲益あゆみ(南島原市教育委員会世界遺産登録推進室文化財調査員)が担当した。また全体の編集・監修は安高啓明(熊本大学文学部准教授)がおこなった。

I

有馬と世界

Arima and World

13世紀頃、この地域に領地をもった有馬氏はその後日野江城を築き、16世紀頃には半島内の豪族を傘下に収め、島原半島や肥前の大半を領有した。日野江城跡出土の資料からはアジアをはじめとする海外との交流や中央政権との繋がりのもと、勢力を保っていた様子が窺える。

また、ヨーロッパでは布教や貿易、植民地を求め各国がアジアや南米、アフリカ大陸などへ進出した。キリスト教は早くから中国やアフリカ大陸にも伝わっていたが、この大航海時代を経て西欧の文化が世界中に広まっていくこととなる。



1. 土師質土器

Haji type pottery

南島原市所蔵

釉薬をかけない素焼きの土器で、日野江城跡では本丸や二ノ丸などで大量に出土した。中には破損が少なく、まとめて廃棄された状態で検出されたものもあり、これらは日常的に使われたものではなく儀礼などに使用されたものと考えられる。土師質土器を使用した儀礼は中世武家社会にみられ、有馬氏も日野江城でこのような儀礼を行っていたことがわかる。(稲益)





2. 風炉

Wind furnace

南島原市所蔵

風炉は茶道で使用される火を入れて釜をかける道具で、日野江城跡では本丸の発掘調査で出土した。茶道は戦国大名の間で流行し、自らの教養を示すものであり、社交・外交の場にもなった。日野江城を訪れたイスパニア商人の記録にも日野江城に茶の湯のための部屋があったという記述が残されている。(稲益)



3. アジアの陶磁器(日野江城跡出土)

Ceramics made in Asia

南島原市所蔵

有馬氏の居城であった日野江城跡からは、壺や碗、皿など多くの輸入陶磁器が出土した。多くは1500年代のもので、白地に青で文様を描いた青花が多いが、白磁、青磁、三彩など様々な種類が出土している。産地の多くは中国であり、東南アジアのものも含まれる。有馬氏がキリスト教と出会う前後、海を通じて広くアジアの文化を取り入れていたことがわかる。(稲益)

4. 景教僧文青磁壺

Porcelain of *Keikyo* priest

13世紀/青磁/中国
西南学院大学博物館所蔵

中国浙江省の越州窯で元代(13世紀)につくられたものである。壺の四面に聖職者像が貼り付けられており、その特徴から西域人と思われる。修道衣の腰紐などはフランシスコ会の僧服に類似している。中国にはネストリウス派キリスト教が635年に伝えられており、景教と呼ばれた。845年に仏教禁圧に連動して衰退するが、これ以降、傾廃と再興を繰り返した。この再興期が13世紀のフランシスコ会士たちの布教期に相当し、本資料はこの頃につくられたものと位置付けられる。(内島)



5. 農民聖イシドロと寄進者

St. Isidoro of Farmer and a donor

19世紀/フィリピン
西南学院大学博物館所蔵

農民とマドリッドの守護聖人である聖イシドロ(1070頃-1130年)を描いた礼拝画。イシドロは敬虔な信徒であったため、朝の礼拝をしている間に天使が彼に代わって牛に鋤を引かせて畑仕事を何倍もの速さで進めてくれたという奇跡の物語がある。本資料では手を合わせる寄進者とともに、その奇跡の物語が背景に表されている。また、聖イシドロは1521年以降にスペイン人がキリスト教を広めたフィリピンでも、広く崇敬を集めた聖人である。(内島)

II

西欧との出会い

Encounter with Europe

日本へ到達したスペインやポルトガルの船は様々な新しい知識・文化をもたらした。天文12(1543)年に種子島に伝来した鉄砲は、日欧交流の起源である。また、同18(1549)年にフランシスコ・ザビエルによって伝えられたキリスト教により、交流は一層進展することになる。各地の戦国大名が南蛮船との交易を求めたことから、南蛮文化の創出をもたらした。

しかし、天正15(1587)年、豊臣秀吉によって伴天連追放令が出されたことをきっかけに、日本は禁教・海禁の時代へと向かっていく。キリシタン文化繁栄の光と影、そして弾圧の歴史から当時の人々の西欧に対する様々な想いを見ることができる。

II-1 キリシタン文化の受容と排斥

有馬地域とキリスト教の関係は永禄6(1563)年、ルイス・デ・アルメイダによってキリスト教布教活動が開始されたことが端初である。天正7(1579)年にはヴァリニャーノが口之津を訪れると、翌年には有馬晴信がキリシタン大名となり、セミナリオの建設や天正遣欧使節の派遣などキリシタン文化が花開いた。一方、キリスト教の繁栄は古くからこの地で信仰された仏教等の宗教との対立も引き起こした。未知の文化との出会いは、寺社・教会の破壊など互いに激しい排斥をももたらした。

6. フランシスコ・ザビエル像

Statue of St. Francisco Xavier

18世紀/インド
西南学院大学博物館所蔵

イエズス会士フランシスコ・ザビエルは1549年に鹿児島に上陸し、日本にキリスト教を伝えたが、この前にはインドで伝道を開始している。1533年にインドのゴアに司教区が設立されると、42年にはザビエルが到着した。インドでの活動はまさに日本での伝道の布石となっていた。この資料の頭頂部には穴が開いていることから頭光(ニンプス)を表す部材があったものと思われる。これはザビエルが聖人であることを示すものである。本資料はインドで制作されたもので、同地でもザビエルは篤く信仰されていることがわかる。(内島)





7. 花十字紋瓦

Tile in Hara castle

南島原市所蔵

原城跡本丸から出土した瓦で、花十字紋が施されている。イエズス会の報告書に、原城は慶長9(1604)年に完成し、その際に祝別(聖なるものとする)を受けたと記されており、この花十字紋瓦は原城の門櫓など主要な建物に使用されていた可能性がある。有馬氏によるキリスト教の保護と繁栄を想像させる。(稲益)

コラム

日野江城跡階段にみる 仏教とキリスト教の対立



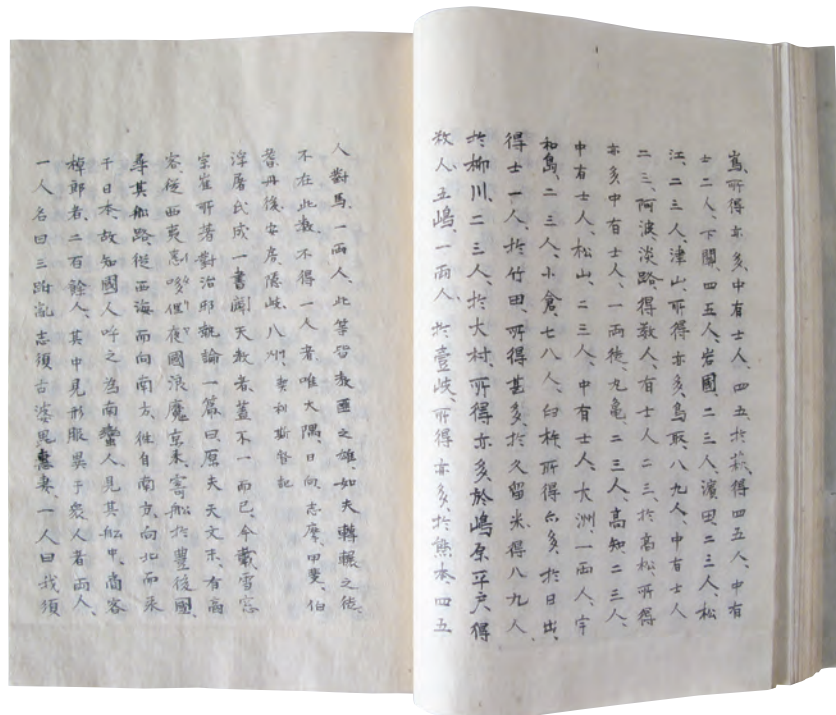
8. 日野江城跡階段

華やかなキリシタン文化が栄える一方で、キリスト教は有馬に元来根付いていた仏教や修験道などの宗教と対立した。古くから有馬の地で続いてきた温泉山の修験道の山伏や仏教の僧たちにとって、西欧から突如もたらされたキリスト教に対する反発は強いものであった。またキリスト教側も、日本古来の仏教などの宗教は布教を妨げる存在として敵視しており、例えばルイス・フロイスは温泉山にいた修験道の山伏をキリスト教に敵対する悪魔とも称している。新たな文化との出会いの陰には、未知の文化を受け入れられないという考えも強く存在していたことがわかる。

このような中、領主である有馬晴信がキリシタン大名となると、キリスト教勢力が力を持ち、天正8(1580)年、晴信は領内の神社仏閣を破壊した。フロイスは著書『日本史』でこのことについて次のように書いている。

「巡察師が滞在した三カ月の間に、大小合わせて四十を超える神仏の寺社がことごとく破壊された。それらの中には、日本中で著名な、きわめて美しい幾つかの寺院が含まれていた。仏僧たちは、そのすべてがキリシタンになるか、さもなければ有馬領から去って行った。」

有馬氏の居城であった日野江城跡では、五輪塔や宝篋印塔など仏教の石塔を踏み石に用いている階段が発見されている。これらの石塔は、晴信による寺社破壊の際壊された石材を再利用したものと考えられている。晴信がどのような意図で用いたかについては検討が必要だが、当時有馬地域で発生した仏教とキリスト教との対立、そして寺社の破壊という歴史を物語る遺構である。(稲益)



9. 原城紀事

Records of Shimabara – Amakusa rebellion

西南学院大学博物館所蔵

本資料は島原・天草一揆の顛末を記録した原城紀事であるが、その中に「対治邪執論」という排耶書が掲載されている。排耶書とはキリスト教を批判する目的で書かれた書物で、江戸幕府による禁教令が出されて以降、仏教勢力などによって刊行された。対治邪執論は豊後白杵の多福寺の僧、雪窓宗崔が正保5(1647)年に著作したものである。キリスト教はキリストが仏法を学んでひそかに取り入れたものであり、仏法の理を悟らず外道に陥ったものだという観念が基底をなしており、民衆に対しキリスト教を信仰しないよう述べている。このような書物は、西欧との出会い以来続いてきた仏教とキリスト教との対立の産物の一つであり、禁教・海禁政策下、人々のキリスト教観に影響を与えていった。(稲益)

10. 青銅製箱型十字架

Bronze cross

南島原市所蔵

原城跡より出土した青銅製の十字架。聖遺物を納められる仕様となっている。星、茨冠、金槌、釘抜などの「受難の道具」が描かれ、その裏面には蔦状の植物の模様が描かれている。両面とも背景は魚子模様になっており、繊細な細工でキリスト教のモチーフが表現されている。本資料は原城に立て籠もった一揆勢が所持していたものと考えられ、西洋からもたらされたキリシタン文化が日本の民衆にも広まっていた様子を窺うことができる。(稲益)



II-2 島原・天草一揆

江戸幕府の出した禁教令によって、島原藩では厳しいキリシタン弾圧が行われた。寛永14(1637)年、重税や飢饉への不満なども重なり領民が蜂起した島原・天草一揆は、原城を戦場とし、多くの犠牲者を出す大事件となる。幕府の宗教政策の方針を決定するうえでも大きな衝撃となったこの一揆は、その後の日本の禁教・海禁政策へも影響を与えていく。



11. 天草四郎

Ukiyo-e of Amakusa Shiro

明治7(1874)年
西南学院大学博物館所蔵

島原・天草一揆の首領の益田四郎時貞は、小西行長の旧臣で浪人の益田甚兵衛好次を父にもつ。キリシタンになった時期は不明であるものの、洗礼名はジェロニモとされる。資料によると四郎のことについて、美形であり才気煥発、医術を心得ており、武術にも長けている。色々な奇蹟をおこなった教義にも精通した人物として紹介されている。本資料は明治時代に作製された天草四郎の版画であるが、甲冑を身に付けた勇猛な姿で描かれている。天草四郎に関するこうした版画がつくられていることは、禁教解禁を象徴するものともいえよう。(内島)



12. 原之城乗吟味帳

Records of Arima clan

南島原市所蔵

かつて島原地域の領主であった有馬家は、島原・天草一揆が起こった際、幕府軍として鎮圧に加わった。本資料はこの時の有馬家の記録であり、一揆の最後の戦いとなった寛永15(1638)年2月27・28日の原城での戦いにおいて、有馬家の家臣たちがそれぞれどのような行動をとったかが詳しく報告されている。槍や石、鉄炮などを用いて一揆軍と幕府軍が激しく戦い、有馬家中にも多くの死傷者が出た。また、中には原城の石垣や門などについての記述もあり、この史料から今は見ることができない当時の原城の姿を想像することもできる。(稲益)



13. 集成嶋原記

Records of Shimabara – Amakusa rebellion

南島原市所蔵

島原・天草一揆について述べた書物。冒頭部分ではキリスト教の伝来について記されているが、キリスト教は南蛮西洋国の邪法であり日本を奪おうとしたなど、禁教下のキリスト教を邪宗とする考え方によって書かれていることがわかる。キリスト教の禁止については豊臣秀吉を由来として挙げているが、天正15(1587)年に出された伴天連追放令以後、日本ではキリスト教が禁止されていき、慶長19(1614)年には江戸幕府によって全国でキリスト教が禁止された。(稲益)

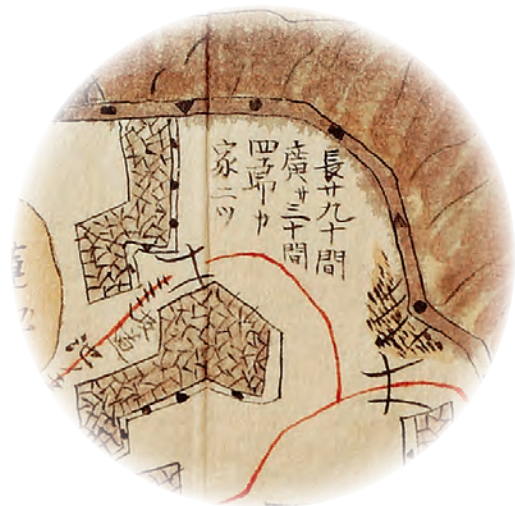


14. 肥前島原記

Picture of Hara castle

西南学院大学博物館所蔵

島原・天草一揆の軍記である「肥前島原記」に収められた原城攻略陣図。一揆勢の籠った原城と、その前面につくられた幕府軍の柵や井楼などが描かれている。一揆勢は廃城であった原城にこもり、残っていた石垣などを補強して防備を固めていた。絵図にも本丸を囲む石垣や、本丸内にあったとされる四郎家の記述が見られる。(稲益)



本丸拡大部分



15. 原城跡出土遺物(砲弾、十字架、メダイ、ロザリオ珠)

Christian monuments in the remain of Hara castle

原城跡の発掘調査では一揆の際に用いられた砲弾や弾丸、多くのキリシタン遺物が発見され、戦いの様子を知る貴重な資料となっている。

砲弾・弾丸は鉄製の筒の玉と、鉄製・鉛製の火縄銃の玉が発見された。幕府軍の記録にも、江戸から大量の武器・弾薬を送ったことが記されており、原城へ向けて激しく砲撃・射撃が行われた。また、メダイや十字架などのキリシタン遺物は一揆勢の人骨のそばで発見されており、彼らが確かにキリスト教を信仰していたことが証明された。(稲益)

III

日欧交流の果てに

After Exchange between Japan and Europe

島原・天草一揆によって、日本の禁教・海禁政策は一層強化された。寛永16(1639)年にはポルトガル船の来航が禁止され、同18(1641)年にはオランダ商館が出島に移されると、日欧交流は制限されていく。一方、長崎での中国・オランダとの貿易を通してもたらされた海外の文化や、禁教下、密かに信仰を保ったキリスト教徒の存在は、日本と海外との関係が途切れなかったことを示している。禁教・海禁政策とその下での海外との繋がりから、江戸時代の日本を眺めていく。

16. マリア観音像

Statue of Mary Kannon

17世紀
西南学院大学博物館所蔵

江戸幕府の禁教政策下において、潜伏キリシタンたちは慈母観音をマリアと同一視して信仰の対象としていた。擬似信仰のひとつであるが、それだけ江戸幕府がキリスト教を厳しく取り締まっていたことを示している。本資料は中国徳化窯で焼かれた白磁で、浦上村の潜伏キリシタンが所持していたものである。浦上三番崩れや四番崩れで浦上村のキリシタンたちが検挙された際、長崎奉行所に信仰物を悉く没収され、明治に入ると教部省に引き渡されている。しかし、本資料はこれを免れ、長く浦上村のキリシタンが所持していたものである。なお、東京国立博物館は本資料と同類型のマリア観音を所蔵し、これらは国指定重要文化財となっている。(内島)

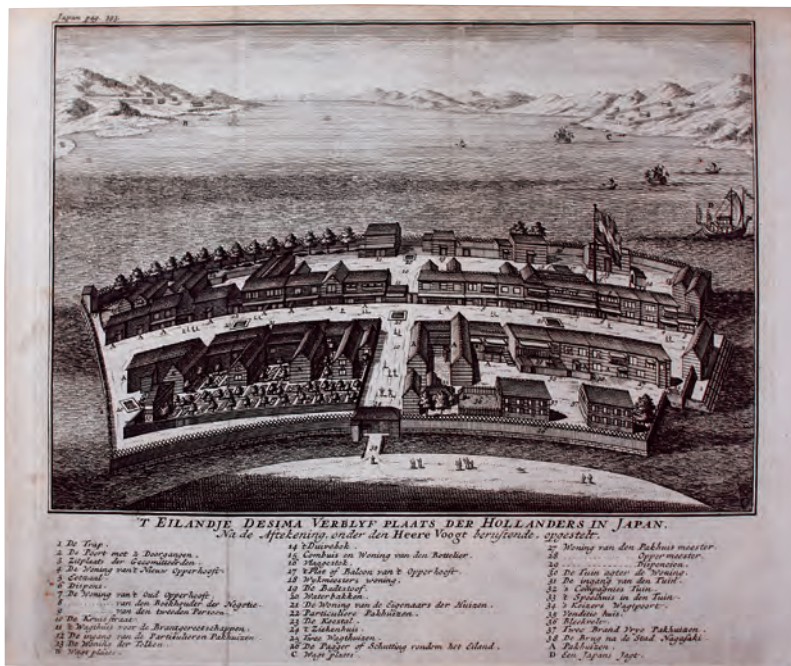


17. 出島図

Map of Dejima

1735年頃
西南学院大学博物館所蔵

出島は禁教政策を象徴するものであり、元来、ポルトガル人を収容するために寛永13(1636)年、中島川下流に出島商人25名が出資してつくられた。寛永18(1641)年、オランダ商館はポルトガル人追放後に空き地となっていた出島に平戸から移転された。オランダ人は出島での滞留を条件に貿易を許され、制限された空間のなかで生活した。出島を外出できる日や出入りできる日本人も限られており、当時のオランダ人たちは出島のことを「監獄」とも表現している。本資料はティリオンが刊行した地図で、享保20(1735)年頃の出島を描いたものである。(内島)



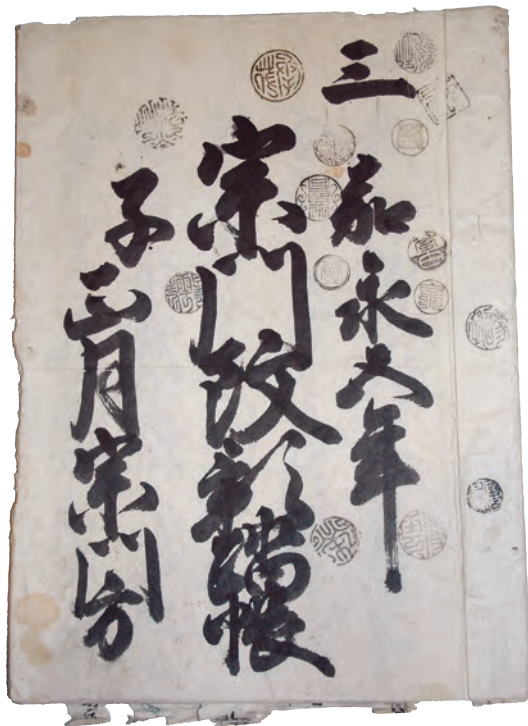
長崎八景[神崎帰帆]

18. 紅毛人プラケット

Small wall hanging with Picture of a Dutch trader

18～19世紀
西南学院大学博物館所蔵

西洋の小型壁掛けを「プラケット」というが、蒔絵技術による描写は18世紀後半に西洋で流行し、出島オランダ商館を通じて日本にもたらされた。本資料は狎をひいたオランダ人をモチーフとしたもので、裏面には長崎八景のひとつ「神崎帰帆」が描かれている。西洋の技術が日本人職人の手によって国産化されたもので、長崎土産のひとつとして作製されたのであろう。日本は禁教政策による鎖国(海禁)体制がとられたものの、西洋の文化・文物・技術などを積極的に受容していたことがわかる。(内島)

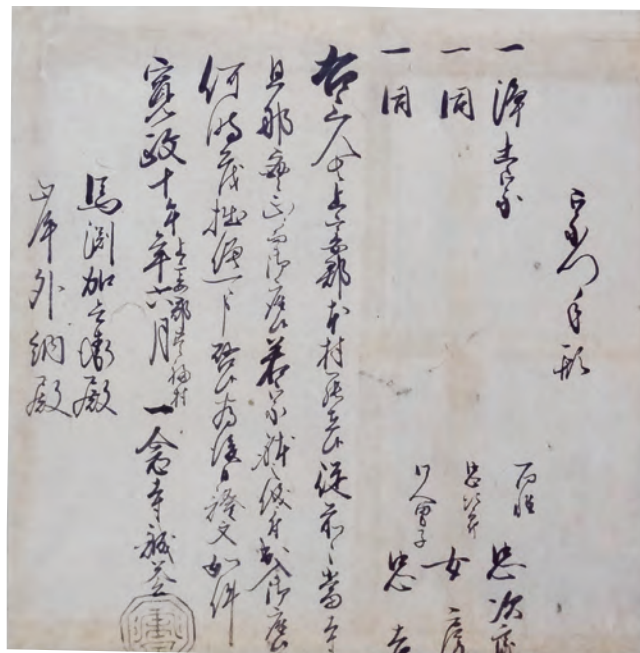


19. 宗門改影踏帳

Religious investigation registers

嘉永5(1852)年
西南学院大学博物館所蔵

本資料は鳴原藩武家の宗門人別改帳である。鳴原藩は長崎奉行所から踏絵を借用して絵踏していた藩のひとつで、絵踏のことを「影踏」と称していたことが本資料名に由来する。鳴原藩では人別改を絵踏と一緒にっており、「宗門人別改帳」に記載されることによって、住民がキリシタンではないことの証明となった。檀那寺と檀家が押印するが、地域によっては爪印が押されることがあった。本資料をみると、戸主以外の妻・男子・女子には筆軸印が押されていることがわかる。(内島)



20. 宗門手形

Religious census certificates

寛政10(1798)年
西南学院大学博物館所蔵

筑後国上妻郡本村(現在の八女郡広川町)に住む、忠次郎と女房、息子の忠吉は浄土宗一念寺が檀那寺であることを証明したもの。もし、三人の宗旨で疑わしいことがあったならば、連絡するようにと触れている。江戸幕府は宗門改にあたって寺請制度を確立したが、キリシタンはもとより、日蓮宗不受不施派などを認めなかったことから、これを証明する必要があった。檀那寺は宗門改をした結果、檀家に対して寺請証文を発給するが、これを寺請証文や寺請状、寺送状などとも呼んでいた。本資料のように筑後国では宗門手形と称していたことがわかる。これは奉公や結婚、引越の際には檀那寺から転居先の寺院に送られていた。(内島)



21. 阿蘭陀国使節長崎入船黒田鍋島陣営図

Picture of Dutch ships entering Nagasaki port

西南学院大学博物館所蔵

天保15(1844)年、オランダ軍艦レバノン号がオランダ国王ウィレムⅡ世の国書と肖像画を持参して長崎に来航する。使節コープスは、長崎奉行伊沢政義らと謁見し、国書を手渡し、開国勧告をおこなう。この翌年、老中阿部正弘により開国は拒否されることになるが、幕府の祖法である「鎖国」が限界に近かったことを象徴する出来事だった。本資料はレバノン号が入港しているときの様子を描いたもので、長崎警備を担当する黒田藩と鍋島藩の様子がわかる。中央にレバノン号を配し、戸町番所や魚見岳、スズレ台場、神崎台場などもみえる。(内島)

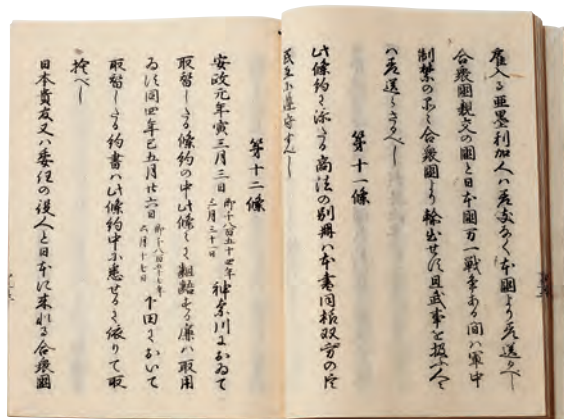


22. 米利幹事略

Records written concerning events with America

江戸時代後期
西南学院大学博物館所蔵

嘉永6(1853)年、マシュー・ペリー率いるアメリカ東インド艦隊が浦賀に来航する。ここでフィルモア大統領の親書を手渡し、翌年の再来航を通達して、一端、香港に戻った。翌年、ペリー艦隊は当初予測されていた浦賀沖ではなく、小柴村に軍艦7隻を率いてあらわれて停泊している。この時の様子を絵入りで描き、その後浦賀での交渉場面も記している。パッティラに乗って測量している様子やアメリカ国旗も描かれている。なお、「浦賀日記」として代官江川太郎左衛門からの報告書も収められ当時の緊迫した国内事情を知ることができる。(内島)



日米修好通商条約



日露修好通商条約

23. 安政五ヶ国条約(写)

The United States – Japan Treaty of Amity and Commerce (copy)

19～20世紀
西南学院大学博物館所蔵

安政5(1858)年、日本はアメリカ・イギリス・フランス・ロシア・オランダと修好通商条約を締結する。これを安政五ヶ国条約と総称するが、その内容は日本にとって不平等なものだった。アメリカと最初に締結するが、その内容は片務的最恵国待遇のもと領事の駐在や函館・神奈川(横浜)・長崎・兵庫(神戸)を開港し、江戸と大坂を開市とすること。そして、自由貿易と関税自主権の喪失、領事裁判権のない治外法権、そして外国人遊歩規定だった。ここでは日本の宗教政策についても言及されており、長崎での「踏絵」中止を求めている。オランダとは居留地内での礼拝堂建立を認めるなど、修好通商条約の締結によって、宗教政策も見直す段階に入ってきたのであった。(内島)



24. プチャーチン会談の図

Illustration of negotiations with Admiral Putyatin

江戸時代後期
西南学院大学博物館所蔵

ロシア艦隊司令長官で遣日使節のプチャーチンは嘉永6(1853)年長崎へ軍艦ディアナ号に搭乗して来航して開国通商や国境画定の国書を渡す。そして同年12月に再来航し、長崎奉行所西役所で日本全権筒井政憲・川路聖謨らと審議する。その後、日露和親条約(長楽寺)で締結、さらに追加条約(長崎)、日露修好通商条約(江戸)を締結した。本資料は筒井政憲らとの審議した後の様子を描いたものであり、「於御書院御返箱御渡之図」「於御書院拝領物御渡之図」である。画者の緒方探香は福岡藩で代々御用絵師をつとめた緒方家の九代目当主である。「黒田二十四騎図」(福岡市博物館蔵)の画者としても知られる。(内島)

関連展示

「原城図書館企画展」

禁教・海禁政策と長崎

Policies of ban on Cristianity and sea traffic in Nagasaki

キリスト教が禁止され、海外との交流が制限される中、長崎は日本で唯一オランダや中国に開かれた窓口としての役割を担った。町人と外国人との交流の制限や、絵踏みなどによるキリスト教の禁止が徹底される一方で、出島や唐人屋敷などを通じて海外の文化がもたらされた。幕末になると外国の軍艦の来航により長崎や九州の諸藩が海防に奔走し、また信徒発見の舞台ともなるなど、江戸時代の宗教政策、海禁政策は長崎の歴史に大きく影響を及ぼしている。禁教・海禁政策のもと、長崎に形成された独特の文化や歴史を見ていきたい。



1. 肥前長崎図

Map of Nagasaki

安永7(1778)年
西南学院大学博物館所蔵

江戸時代中期の長崎図(版元耕寿堂)で、中央には出島、唐人屋敷、新地蔵などが配され、貿易都市としての町並みが広がっている。「鶴の港」と称される長崎港を象徴するように、山に囲まれた良港に唐船やオランダ船が停泊、出港している様子が描かれている。また、左下には当時長崎の別称「瓊ノ浦」、さらに、「唐紅毛船入津ノ大湊ニシテ万代不易繁栄之地」と貿易都市として繁栄している様子が説明されている。(内島)



2. 唐蘭船長崎入津図

Picture of foreign ships entering Nagasaki port

19世紀

西南学院大学博物館所蔵

長崎港には貿易を許可されたオランダ船と中国船が入港していたが、検使船との旗合わせなどの手続きがあった。本資料は歌川貞秀の作で、遠近法を駆使して俯瞰的な長崎港の風景を描いている。天然の良港に相応しい穏やかな長崎港に停泊、曳航されている様子を表現している。(内島)



3. 清俗紀聞

Records of Chinese culture and custom

寛政11(1799)年
西南学院大学博物館所蔵

寛政7(1795)年に長崎奉行に就任した中川忠英は、近藤重蔵らに唐人屋敷に滞在する中国人たちへの聞き取り調査をおこなわせた。中国南部の文化や習俗など唐通事を介して調べ上げ、寛政11(1799)年に13巻6冊からなる本書が完成し、一部幕府へ献上されている。挿絵は長崎派絵師である石崎融思らが担当し、当時の中国人の生活様式を含めて知ることができる。(内島)



4. 蠻艦泊碇港之図

Picture of foreign ships in Nagasaki anchorage

19世紀
西南学院大学博物館所蔵

イギリス軍艦4隻が長崎港に停泊している様子を描いている。鎖国期に長崎へ訪れていたオランダ船と唐船は商船であったが、開国によって多くの軍艦が来航するようになる。黒船と称される蒸気船からは黒煙が上がっており、喧騒な長崎港がよくとらえられている。(内島)



5. キリシタン制札

Proclamation banning Christianity

正徳元(1711)年
西南学院大学博物館所蔵

禁教を広く周知させるのに効果的だったのがキリシタン制札である。本資料は正徳元(1711)年の制札で、伴天連(司祭・神父)の訴人には銀500枚、イルマン(修道士)と立ち帰り者(キリスト教に戻った者)の訴人には銀300枚、同宿(キリシタンの仲間)・宗門(キリスト教徒)の訴人には銀100枚を褒美として与えると記されている。キリシタンを発見し、報告したものは褒美を出すという訴人褒賞制は禁教初期から行われ、金額は時期によって変化するが江戸時代を通じて続けられた。(稲益)

6. 紙踏絵

Fumie

20世紀
西南学院大学博物館所蔵

キリシタン穿鑿のためおこなわれた絵踏は当初、信仰物の聖像画といった紙製のものが使われており、これを紙踏絵といった。その後、メダイを板に嵌め込んだ板踏絵がつくれ、さらに長崎の鋳物師である萩原祐佐が真鍮踏絵20枚を製作する。耐久性の問題からこのような変遷があったが、紙踏絵は絵踏開始初期のものとなる。本資料はその初期踏絵を模して明治期に作られたものである。(内島)





7. 魔鏡

Magic mirror

19世紀
西南学院大学博物館所蔵

一見すると普通の銅鏡であるが、光を照射すると磔刑キリストとこれを拝む聖母マリアが浮かび上がる。Magic mirrorとも呼ばれる魔鏡は、元来、中国で紀元前2世紀頃から2世紀にかけて造られていた透光鏡に由来する。禁教下には厳しい弾圧がおこなわれるが、本資料はキリシタン信仰を示すひとつの事例といえる。(内島)



■南島原市・西南学院大学博物館連携特別展示

「東西交流の軌跡」出品目録

I. 有馬と世界

番号	資料名	制作地・出土地／年代等	所蔵	数量
1	土師質土器	日野江城跡／1500年代	南島原市	25
2	風炉	日野江城跡／1500年代	南島原市	1
3	アジアの陶磁器	日野江城跡／1500年代	南島原市	3
4	景教僧文青磁壺	中国／13世紀	西南学院大学博物館	1
5	農民聖イシドロと寄進者	フィリピン／19世紀	西南学院大学博物館	1

II. 西欧との出会い

II-1 キリシタン文化の受容と排斥

6	フランシスコ・ザビエル像	インド／18世紀	西南学院大学博物館	1
7	花十字紋瓦	原城跡	南島原市	1
8	日野江城跡階段(写真パネル)		南島原市	1
9	原城紀事	江戸時代	西南学院大学博物館	1
10	青銅製箱型十字架	原城跡	南島原市	1

II-2 島原・天草一揆

11	天草四郎	明治7(1874)年	西南学院大学博物館	1
12	原之城乗吟味帳	江戸時代	南島原市	1
13	集成嶋原記	江戸時代	南島原市	1
14	肥前島原記	江戸時代	西南学院大学博物館	1
15	原城跡出土遺物(砲弾、メダイ、十字架、ロザリオ珠)	原城跡	南島原市	7

III. 日欧交流の果てに

16	マリア観音像	17世紀	西南学院大学博物館	1
17	出島図	1735年頃	西南学院大学博物館	1
18	紅毛人プラケット	18～19世紀	西南学院大学博物館	1
19	宗門改影踏帳	嘉永5(1852)年	西南学院大学博物館	1
20	宗門手形	寛政10(1798)年	西南学院大学博物館	1
21	阿蘭陀国使節長崎入船黒田鍋島陣営図		西南学院大学博物館	1
22	米利幹事略	江戸時代後期	西南学院大学博物館	1
23	安政五ヶ国条約(写)	19～20世紀	西南学院大学博物館	1
24	プチャーチン会談の図	江戸時代後期	西南学院大学博物館	2

関連展示 禁教・海禁政策と長崎

[原城図書館企画展示]

1	肥前長崎図	安永7(1778)年	西南学院大学博物館	1
2	唐蘭船長崎入津図	19世紀	西南学院大学博物館	1
3	清俗紀聞	寛政11(1799)年	西南学院大学博物館	1
4	蛮艦泊碇港之図	19世紀	西南学院大学博物館	1
5	キリシタン制札	正徳元(1711)年	西南学院大学博物館	1
6	紙踏絵	20世紀	西南学院大学博物館	1
7	魔鏡	19世紀	西南学院大学博物館	1

海外交流史のなかの南島原

－日本キリスト教史に刻まれる世界遺産登録

熊本大学文学部歴史学科
准教授 安高 啓明

はじめに

日欧交流史の起源は、キリスト教国による非西欧圏進出のなかで見出すことができる。鉄炮伝来、さらに、フランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸を端緒とする日本キリスト教史は、九州を中心に刻まれているといっても過言ではない。キリスト教伝来と布教、そして受容といったキリシタン時代、このなかから創出されて一世を風靡した南蛮文化は、当時の日本に質実両面で大きな影響を与えた。他方、禁教政策の名の下に各地でキリシタン弾圧が展開されるが、島原半島では布教と信仰、禁教が同時におこなわれている。まさに、“日本キリスト教史の縮図”が島原半島に集約されているともいえる。

こうした数奇な出来事が史実として着実に明らかにされてきているなか、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の世界遺産登録を直前に控えて、日本キリスト教史に新たな一頁が刻まれようとしている。本論では、日本の海外交流史を島原半島、特に南島原地域の動きから整理するとともに実際におこなわれていた禁教政策について紹介していく。こうした歴史的事実を踏まえ、世界遺産登録に向けた地域行政のあり方、住民を含めた文化事業の展開と世界遺産登録の意義についても触れていきたい。

海外交流とキリシタン

中近世移行期における海外交流は、キリスト教の東方伝播と密接な関係にある。1567年にポルトガル船が口之津港に訪れると、ここを開港した日野江城主有馬義貞は、キリシタン大名の大村純忠の勧めもあり、横瀬浦にいたトルレスに宣教師の派遣を要求している。これを受けたトルレスはアルメイダを派遣し、口之津における布教の許可を得ることに成功する。以降、多くの宣教師が訪れるところとなり、有馬義貞自身も1576年に妻子や家臣とともに洗礼を受け(洗礼名：アンドレ)、領民へも改宗を勧めている。フロイスは義貞のことを「詩歌に造詣深く、書道に巧みで、為政者としては老練慎重かつ賢明」な人物と評価している。

有馬義貞がキリスト教を保護した動きは、大村純忠と同じように南蛮貿易を目的とするところも大きかった。あわせて、戦国の状況下における、周辺国に対する戦略的意図も含まれている。つまり、軍備増強の一方で、威嚇の要素をもたせながら南蛮貿易が行なわれていたのである。これは、有馬晴信にも同じような動きがみられ、当初、キリシタン禁教を打ち出していたものの、叔父にあたる大村純忠や宣教師カブラル、ヴァリニャーノの説得もあって布教を許可すると、1579年には自らも洗礼を受けている。これをうけてイエズス会もポルトガル船入港の約束、弾薬などを提供している。また、同年にはヴァリニャーノが口之津で全国宣教師会議を招集するなど、口之津が海外交流の拠点となる素地が築かれていたのである。

こうしてキリスト教が媒介となり、南蛮船が各地に入港するようになった。例えば、寄港地であった平戸は、“港市”として都市形成が進められた。市中に「商館」を設置すると、世界的流通圏のなかに日本も包含されることとなった。あわせて、宗教教育機関もつくられるが、特に、南島原市域では、有馬と八良尾、有家にセミナリヨ、加津佐と有家にコレジヨが設置されている。なかでも1580年に創設された有馬のセミナリヨは、日本初の機関であり、画期的なものだった。ここで教育された四名が天正遣欧使節団として派遣されているのは周知の通りである。彼らが帰国したときには印刷機を輸入し、加津佐コレジヨ内に印刷所が設けられ、1591年に『サントスの御作業のうち抜書』が刊行されている。このように、キリスト教をツールとしながら港市がつくられていき、商館ならびに宗教施設の創建により世界的ネットワークの拠点が形成されていった。そのひとつの地域であった南島原で教育された若い人材が海外へ出て行くなど、先進的な活動がおこなわれていたともいえよう。大航海時代の訪れがもたらした影響の背景には、キリスト教布教と外国貿易の不可分な関係があり、その両面を兼備した南島原は、日欧交流の重要な拠点であり、当時の日本の国際関係を如実にあらわしているのである。

禁教と弾圧、そして解禁

ポルトガル船マードレ・デ・デウス号撃沈事件によって、宣教師との関係を悪化した有馬晴信は、海外交流の窓口としての口之津港の機能を失ってしまう。また、岡本大八事件によって有馬晴信は閉門処分となると、さらには、甲斐国に配されて1612年にその生涯を終える。こうしたキリシタンたちによる不祥事が重なったことを受けて幕府の禁教政策は一層厳しさを増すことになる。

有馬晴信の家督を継いだ直純が日野江城から延岡城に転封されて以降、島原は大村・佐賀鍋島・平戸松浦の預地を経て、1616年に松倉豊後守重政が入封する。松倉重政は、水責め、火あぶり、穴吊し、木馬責め、竹鋸挽きなどとキリシタンに対して厳しい弾圧を展開した人物として知られる。その姿勢はキリシタン一掃にほかならず、なかでも雲仙地獄に投げ込まれる「山入り」は、モンタヌス『日本誌』にも収められ、その実情が海外へ発信されている。こうした禁教政策が断行されるなかで、キリシタン組織を結成して教えを守ろうという動きが生じ、有馬にはマルチリヨ組やサンタマリア組、ロザリヨ組がつけられた。



モンタヌス『日本誌』(西南学院大学博物館蔵)



天草四郎(西南学院大学博物館蔵)

キリシタンたちは潜伏形態に移行して組織化していたが、それさえも危うくすることになったのが島原・天草一揆である。天草勢を含めて原城に戦闘員・非戦闘員を含めて約37,000名が立て籠もり、幕府・九州諸藩と戦いが繰り広げられた。この一揆軍の首領の天草四郎については「美形かつ才気煥発」(『島原記』)とあるなど、カリスマ性が取り上げられている。天草四郎は、「細川忠之家臣陣野佐左衛門ト云者」(『肥前島原記』)に討ち取られ、一揆は終焉を迎えた。原城に立て籠もった者たちの死骸は「壘々トシテ山トナシ」(『肥前島原記』)という状態だった。この様子は、原城跡から多数の人骨が発掘されていることから推測できよう。あわせてメダイや十字架などが出土していることは、籠城者たちのキリシタンの結合を象徴する出来事であったことを示している。

島原・天草一揆を経て安定化が図られた島原半島では、宗門改がおこなわれ、キリシタン穿鑿が恒常的におこなわれていくことになった。島原藩は長崎奉行所から踏絵を借りて絵踏を行っており、絵踏のことを「影踏」といった。島原藩が天草を預地としている時も、天草での絵踏を影踏と称して実施している。その際に提出される宗門人別改帳にも、その呼称は反映され、「宗門人別影踏帳」が作成されている。以降、幕末に至るまで、幕府禁教政策を象徴するものとして、島原半島で影踏はおこなわれていくことになった。

安政五ヶ国条約が締結されたことにより、キリスト教政策は転換期をむかえる。長崎での絵踏の廃止が日米修好通商条約に盛り込まれるなど、外交問題として取り扱われた。禁教政策は実質的には明治政府にも引き継がれており、浦上四番崩れの処置はこれを象徴する。キリスト教の信仰が許されるようになったのは、キリシタン制札が撤去される1873年のことである。こうした経緯により、前掲の天草四郎の版画がつけられるなど、日本国内の情勢も変化してきたことがわかる。江戸幕府、そして明治政府へと政権が移ったことで、宗教政策も変容し、これが地域社会にも反映されたのであった。

史実を伝える－世界遺産登録に向けて

このように海外交流史のなかに南島原を位置づけてみると、日本キリスト教史の光と影が混在する数少ない地域であることがわかる。公平中立の立場で正確な史実を多くの方々に認識してもらい、行政をあげて発信するこ

とが求められるとともに、近隣住民の文化振興への理解も必要であろう。各人が身近な歴史について関心を寄せることが肝要ではあるが、そうしたきっかけ作りをおこなっていく施策を展開しなくてはならない。学校教育において地域史を掘り起こす仕組みづくりが大切で、これは次世代に文化財や史跡などに対する理解を促す効果が期待できる。早い段階で地域の歴史や文化に関する教育機会を設けると同時に、社会人一般に対する生涯学習をも同時に実施していくとより良い成果が挙げられるであろう。

世界遺産登録に至ると、構成資産の現状維持、さらには発展させていかなければならない。これは、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」にも明記されていることである。登録によって観光客が訪れ、知見を深める機会を提供することによって、地域に潤いをもたらすであろうが、その本義は“次世代への伝承”である。「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」の構成資産のなかでも、南島原市は日野江城跡と原城跡といった日本キリスト教史のなかでも画期と位置づけられる史跡を有している。信仰を基礎としたキリスト教会群とは性格が異なる構成資産は、南島原市の強みであり、特徴ともいえる。

世界遺産登録は、“地域的資産価値”からの脱却であり、“国際的資産価値”としての商品的意義をとまなう新しい性格が生まれる。地域と国際という一見すれば相反する用語であるが、世界遺産に求められるのは両者の共存共栄である。いわゆる“グローバル”としての価値であり、この創出には地域性と国際性が等しいレベルでの存在意義を見出さなくてはならない。構成資産は、本来、地域性を担保に国際的資産価値が創出されるのであって、両者のバランスこそが重要である。そのため、観光客という一過性の対象者ばかりを重視するのではなく、地域住民への行政による絶え間ない教育機会の提供が必要なのである。世界遺産登録はあくまでも到達点ではなく、転機としてとらえなくてはならないといえよう。

おわりに

日本の海外交流史をひも解くなかで、島原半島は看過できない歴史舞台となっている。近世の海外交流が長崎へと移る以前の様子を示すのが南島原である。そして日本キリスト教史のなかでも不可欠な日野江城跡・原城跡を構成資産として有する南島原市は、他地域とは異なる多種多様な取り組みが可能である。今日に至るまでしかるべき調査研究が進んでおり、成果が挙げられている現状は“活きた遺産”として、積極的に行政・文化・教育等の多方面で活用すべきである。

南島原市のこれらの資産が世界遺産登録への推薦、さらに登録に至るとすれば、大変喜ばしいことである。行政・住民一体となった世界遺産登録に向けた取り組みの充実を期待するとともに、さらなる飛躍を求める次第である。登録を一時のイベントとして認識するのではなく、歴史や文化などをはじめとする多分野での転機とする起爆剤として認識することも必要であろう。地域住民にとっても身近に世界遺産があることは、郷土の誇りであり、自負にかわる。将来的に地元の発展に尽力する人材育成を含めた、魅力ある街づくりを南島原市には期待して擲筆としたい。

参考文献

- ・松田毅一編『完訳日本史』1～12(中央公論新社、2000年)
- ・児玉幸多、北島正元『第二期物語藩史－九州の諸藩』(人物往来社、1966年)
- ・五野井隆史『日本キリスト教史』(吉川弘文館、1990年)
- ・安高啓明『歴史のなかのミュージアム－驚異の部屋から大学博物館まで』(昭和堂、2014年)

文字史料に残された島原・天草一揆時の原城

南島原市教育委員会 世界遺産登録推進室
文化財調査員 稲益 あゆみ

はじめに

かつての有馬氏の城であり、寛永14(1637)年、島原・天草一揆の舞台となった原城は、一揆後に幕府軍により徹底的に破壊され、現在は城跡が残るのみである。平成4年度より行われている発掘調査では石垣や門跡、建物跡などの遺構が検出され、かつての姿が浮かび上がってきている。しかしその全体像の把握には更なる調査や様々な資料の検討が必要であり、文字史料もその材料のひとつである。原城に関する文字史料は多くはないが、宣教師の報告書や、島原・天草一揆の際、鎮圧にあたった幕府軍が残した記録や書状、絵図などがある。中でも幕府軍の史料には一揆当時の原城や一揆勢の様子が記されている箇所があり、当時の原城の姿をより具体的に知ることができる。本稿では島原・天草一揆時の幕府軍の記録に残された原城に関するいくつかの記述から、当時の原城の様子を見ていきたい。

1. 原城の概要

原城は有馬氏によって慶長5(1599)年から同9(1604)年頃に建てられたとされる。三ノ丸、二ノ丸、本丸、松山丸(天草丸)などからなり、周囲は約4kmに及ぶ。宣教師の記録に有馬氏が元来の居城である日野江城よりも堅固な新しい城を築城している旨が記されており、家臣の屋敷や日野江城下にあった教会も共に移転しようとしたものと考えられている。

原城の特徴の一つに、本丸を囲む石垣と巨大な入口空間がある。

原城の三ノ丸や二ノ丸は地形を活かした土造りであるのに対し、本丸は石垣に囲まれた造りであった。発掘調査で検出されたこの本丸の石垣は、一揆後に大きく破壊されていたが、調査の結果、慶長年間前期の城郭の影響を受けた石垣であることが判明した。有馬晴信は文禄・慶長の役に出兵しており、その際に名護屋城などの築城によって得た技術を原城に用いたと考えられている。

また、本丸北側では本丸へと続く3カ所の門跡が発見された。最も本丸寄りの門と、最初の門では礎石が発見されており、いずれも瓦が多く出土していることから瓦葺きの建物が建っていたと推測されている。また、真ん中の門では水路や階段の跡が発見されている。原城はこのような堅固な石垣や巨大な入口の構造による厳重な防備体制を持つ城であった。



2. 幕府方史料に見る原城

一揆の際、松平信綱に従って有馬に入った幕府小十人の鈴木三郎九郎は一揆勢の籠る原城の様子について「一揆共取籠居申候古城惣廻り之堀并内之体、いかにも丈夫ニ普請仕居申体ニ見へ申候事¹⁾」と報告している。一揆勢は島原・天草の村々や島原城・富岡城などを襲撃した後、原城に籠った。その際食料や武器などを運び込み、城の内部についても頑丈に普請して防備を固めていた。

また、本丸について「城中本丸ニは古キ石垣其保ニ而御座候、其内ニ寺をつくり参下向仕由ニて、むね高き家式つ見へ申候」との記述がある。古い石垣がそのままになっているという記述からは、一揆の時、すでに廃城となっていた原城に当時の石垣が未だ残されていたことがわかる。また、本丸に寺があり、棟の高い家がふたつ見える

という記述については、詳細は判然としないが、原城を描いたいくつかの絵図にもこの記述のように大きな建物が描かれているものがあり、城内に信仰のための建物があつた可能性もある。

二ノ丸や三ノ丸などについては、「二三之丸の内小屋かけ、あきまなく見へ申候、過半ぬり屋之由申候、二之丸ニも小屋かけ、二之丸半分程家数見へ申候」と記されており、小屋が多数建っていたようである。数万人の一揆勢がここで籠城中の生活を送っていたと考えられ、この記述によれば城中に隙間のないほど多くの小屋が建てられていた様子を想像することができる。一揆時の原城を描いた絵図にも、このように多数の小屋が描かれているものがあり、原城を包圍した幕府軍からこのような景色が見えていたのだろう。

熊本藩士の記述にも「城の躰見事ニかこひ申候、本丸・二ノ丸・三ノ丸の出城并南の山尾崎まで立置申候昇・家数城中の明地も無之立申候、殊の外大キ成家共も大分相見申候²」とある。城の周りにのぼりがたち、城中には家が空き地もなく建っているとのことであり、ここでも多数の一揆勢が城に籠り、幕府軍と対峙する様子が記録されている。

更に、島原・天草一揆に関する史料の中には、当時原城に残っていた石垣や門に関する記述が残されているものもある。中でも「埋門」に関する記述は注目される。

埋門(うずみもん)とは石垣や土の堀などの下部をくり抜いたような形で、戦闘時には穴を埋めて敵を通さないようにした門である。当時の資料の中に、原城に埋門(資料によっては穴門などと記される)があつたという記述が残されている。前述したように原城跡の発掘調査では本丸に続く3つの門跡が検出されているが、この内2番目の門がこの埋門にあるとされている。延岡藩有馬家の記録である「原之城乗吟味帳」にもこの門について書かれて

おり、「(2月27・28日の総攻撃の際)本丸之うつミ門ニ参候へハ、門あき不申候、打やふり候へハ敵三四人程居申候」との記述からは、このような門が一揆当時も残っており、一揆勢が塞いで通れない状態にしていた様子を窺うことができる。当時の原城に残っていた石垣や門の状況、それらの一揆勢による利用の実態を知るうえで貴重な手がかりとなる。

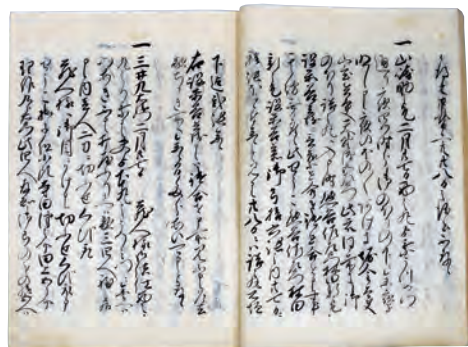
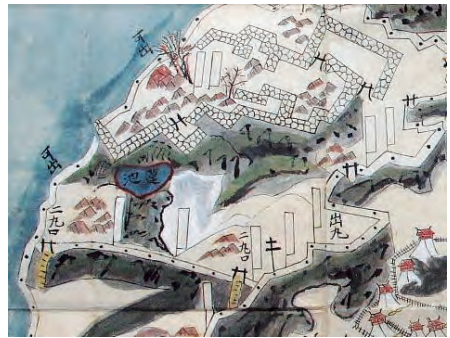
このように、幕府軍によって記録された原城についての記述から、一揆の際、籠城した領民たちは有馬氏の居城であつた原城を利用し、頑丈に防備体制を固めて幕府軍と対峙したということがわかる。幕府軍が容易に落とすことのできなかつた当時の原城の姿をより具体的に想像することができる。

おわりに

本稿では文字史料に記された原城を紹介したが、この他にも多数の記述があり、様々な当時の様子を知ることができる。一方これらの資料は当時の原城の様子を知る貴重なヒントであると同時に、これだけでは不明・不確かな点も多く残る。発掘調査の成果、文字史料、絵図など様々な資料から、引き続き原城の姿を探り、原城の持つ様々な価値を明らかにしていかなければならない。

注

- 1 鶴田倉造編『原史料で綴る天草島原の乱』(本渡市、1994年)「寛永15年1月7日 鈴木三郎九郎より大坂衆へ」
- 2 前掲『原史料で綴る天草島原の乱』「寛永15年1月8日堀江勘兵衛より長岡監物等へ」



アジアにおけるキリスト教の布教と受容

－西南学院大学博物館所蔵資料から－

西南学院大学博物館
学芸研究員 内島 美奈子

はじめに

1549年における日本へのキリスト教伝来と同時期に、アジアの様々な国にキリスト教が伝えられている。その背景には、1517年に西欧で始まった宗教改革がある。この際、ドイツを中心とした地域でカトリック教会に対する抗議活動がおこり、改革を推進するプロテスタント派が形成され、カトリック教会から分離した。そこで、カトリック教会は新たな信徒を獲得するためアジア布教に乗り出した。また、大航海時代の幕が開け、ポルトガルやスペインを始めとする西欧の国々は、海外の領土を獲得するため世界に向けて船を出した。その船に宣教師たちは乗り込み、支配地域の住民にキリスト教の教えを説いていったのである。そうしてアジアの広大な地域の国々に伝えられたキリスト教の受容の仕方は、国によって様々である。

本稿では、本学博物館が所蔵する資料で本展覧会に展示したもののなかから、インドとフィリピンで制作された資料を選び、その布教と受容について、歴史的背景とともに紹介していく。

インドのザビエル像－アジア布教の始まり

16世紀に始まるアジア布教の最初の舞台はインドである。結論から言えば同地でキリスト教が普及することはなかったものの、インドの都市ゴアはアジア布教の歴史において重要な場所である。1498年にポルトガル人ヴァスコ・ダ・ガマによってインド航路が開拓され、ポルトガル王は大船隊を送ってインド周辺の海域を支配した。王は香辛料貿易を営む一方で、支配する地域の住民をキリスト教化すべく、ローマ教皇に宣教師の派遣を要請した。そこで派遣されたのはイエズス会のメンバーであった。彼らは1540年にローマ教皇により認可されたばかりの修道会であり、世界に向けて布教活動を行うことを会の方針としていた。1542年、ポルトガル領インドの首都ゴアに、イエズス会の中心メンバーのひとりであるフランシスコ・ザビエルが到着する。彼はアジアにおける布教活動に重要な役割を担った人物であり、後に続く宣教師の目標となった。ザビエルはインド南東部の貧しい漁夫海岸に赴き、集団改宗の試みや、現地で作成した「公共要理(カテキズモ)」をタミール語に翻訳するなど、滞在した5年間に精力的な活動を行った。だが、多数の民族が存在するインドでは、使用される言語が多様であるなどの理由から、現地での布教の拡大と信仰の維持は難しいとザビエルは書簡のなかで伝えている。同地でキリスト教が広く根付くことはなかったものの、当時の宣教活動の拠点であったゴアにおいてザビエルは特別な崇敬を得ている。

本資料は、個人礼拝のためにゴアで制作されたザビエルの木製の立像である(資料no.6)。同地では多くのザビエル像が制作され、象牙製のものもある。多数の礼拝像にうかがえる同地でのザビエルへの崇敬は、ゴアにあるボン・ジェズ教会にザビエルの遺骸が安置されており、特権的な場所であるためである。1552年にザビエルは中国の上川島で病死し、その3ヶ月後に遺骸がゴアへ運搬された。その間、遺骸は腐敗しなかったという奇跡が伝えられている。この奇跡はザビエルへの崇敬を高め、1619年に福者、1622年に聖人に列せられた。ただし、ザビエル崇敬の高まりの背景には、西欧から遠く、命の保証がない危険なアジアでの布教活動を行う宣教師たちを鼓舞するというカトリック教会の狙いもあったとされる。聖人となると、その遺骸は聖遺物として信仰を集め、ザビエルの右腕の関節から先が切り取られ、ローマのジェズ教会に安置され、信仰を集めている。ザビエルが列聖されるにともなって、祭壇画や壁画にザビエルの生涯の物語が表された。そうして、ザビエル像の図像が形成されていく。その特徴は、象徴的な持物としてともに描かれる十字架、心臓、太陽などである。また、胴衣の胸を開き、篤く燃える信仰心を表した姿で描かれる。



(図1) 西南学院大学博物館所蔵
《フランシスコ・ザビエル像》の上部

インドで制作された他のザビエル像を見てみると、巡礼の杖や磔刑像の十字架を持っている。本資料には両手に穴が見つけれられることから、本資料もそれらを持っていた可能性が高い(図1)。また、その服装にはいくつかパターンがあり、黒い司祭服の姿や、聖職者用の短衣、聖職者用のストラを身に付けた姿がみられる。また、イスラム風の金糸で刺繍された黒の司祭服とマントを羽織っている姿もある。本資料では、短衣、ストラを身に着けた姿であり、インドではよく見られるザビエル像である。これらの作例は、現地のインドの人々が手がけたものとされている。布教当初は、礼拝像や礼拝画が西欧からもたらされたが、17世紀になると現地の美術家が制作を担うようになったという。ザビエルはインドの後、マレーシアのマラッカを経て日本の鹿児島に上陸するが、日本にも日本人の手によって描かれたとされるザビエル像が残されており、日本でも篤い信仰を集めたと推測される。

フィリピンの礼拝画－アジア布教の発展

1521年、フィリピンにスペイン艦隊を率いたマゼランが到着した。その後フィリピンはスペインに支配され、当時のスペイン皇太子フェリペ2世の名にちなんでフィリピナス諸島と名付けられた。同地でのキリスト教の布教は、本格的に侵攻が進められた1565年から始まった。布教を担ったのはスペイン系托鉢修道会である。彼らは中国・日本布教の足がかりとしてフィリピンにやってくる。同地ではキリスト教が浸透し、今でもキリスト教が多くの住民に信仰されている。

布教の際に西欧で制作された礼拝画などが持ち込まれたが、しばらくすると現地のひとびとに制作されるようになった。教会の祭壇を飾る公的なものから、個人の祭壇を飾る私的なものまで幅広く制作され、現在でも多く目にすることができる。特に、礼拝像は「サント」と呼ばれ、宗主国であるスペインの「聖人」という言葉に由来する。また、スペインの聖人が同地で信仰を集めており、本資料に描かれた農民聖イシドロもそのひとりであった(資料no.5)。11～12世紀の聖人イシドロは農民とマドリッドの守護聖人である。敬虔なキリスト教徒であったイシドロには次のような奇跡が伝えられている。畑仕事の前に欠かさず祈りを捧げていたイシドロに代わって、天使が牛に鋤を引かせている姿が目撃されたというものである。また、乾いた地面に杖を突いて水を湧かせる奇跡を起こしたという。本資料では、この2つの奇跡の様子が前景と後景に表されている(図2)。聖イシドロの横には、本資料の制作を依頼したと思われる寄進者が手を合わせて祈る姿で描かれている。

その他、聖母マリアが原罪なくして生まれたという教義を表す「無原罪懐胎の聖母」像が、当時のスペインで人気を集めており、フィリピンでも多数の像が制作されている。フィリピンにおける多数の礼拝画・礼拝像は、フィリピンにキリスト教が浸透したことを示す資料といえる。また、同地と日本は近くに位置することから、フィリピンで制作された礼拝像などが貿易都市マニラから日本へ渡った可能性がある。



(図2) 西南学院大学博物館所蔵
《農民聖イシドロと寄進者》の部分

おわりに

以上、当館の資料からインドとフィリピンにおけるキリスト教の布教と受容についてみてきた。それぞれの布教と受容の様相は、日本のそれと比べても異なっていることがわかる。ただし、礼拝像や礼拝画の使用と制作は、まず西欧から持ち込まれ、ほどなくして現地のひとびとが制作するようになったという点は共通しているといえる。現在も残されるそれらの資料は、布教の歴史や、同地の信仰の状況を知らせてくれるものである。

参考文献

浅見雅一「フランシスコ＝ザビエル東方布教に身を捧げた宣教師」平凡社、2011年
東武美術館・朝日新聞社編『大ザビエル展』東武美術館・朝日新聞社、1999年
米倉立子編『境界は出会いの場 非西欧圏のキリスト教文化』西南学院大学博物館、2008年

南島原市・西南学院大学博物館連携特別展

東西交流の軌跡 —有馬とヨーロッパの出会い—

監 修 安高啓明
資料解説 内島美奈子 稲益あゆみ
発 行 南島原市
〒859-2211 長崎県南島原市西有家町里坊96番地2
西南学院大学博物館
〒814-8511 福岡県福岡市早良区西新3-13-1
発 行 日 2015(平成27)年8月28日
印 刷 株式会社 インテックス福岡



 **南島原市**

〒859-2211 南島原市西有家町里坊96番地2

 **西南学院大学博物館**

〒814-8511 福岡市早良区西新3-13-1